

ぶるす

四季の会・ユーザーズ・サービス

339号

発行人 浅沼 邦夫

拝啓 陽春の候、先生におかれましては益々御健勝のことと存じます。

事業繁栄のための大きなファクターは「4C」といわれます。「コンディション」外部環境です。「キャピタル」自己資本です。「キャパシティ」経営者の経営能力です。「キャラクター」経営者の性格、また経営者の器です。企業の盛衰を左右するのは、外部要因ではなく、内部要因にあるのです。それは経営者の性格、経営者の器であり、経営者の正しい決断が事業繁栄の原動力にあるのです。

経営にとって大事なことは「P-D-C-A」サイクルといわれます。「P」よりも「C」が重要だと私はよく語ります。計画するだけなら誰でもできる。着実に実行する行動力は大事だし、重要なことは、振り返り、徹底して、問題点を抽出したうえ、新たな改善策を考えていくことです。

つまり、決算が大事だということです。決算をしない会社はないし、経営者は決算書に最大の関心を持っています。経営者を数字に強くしないと、この時代に生き残れないのです。何度となく修羅場を切り抜けてきた経営者は、自らの「経験とカン」を頼りにした経営に、自信を持っている人は少なくありません。だからこそ、数字を強くしないと、「勘とコツ」が重要な役割を果たせなくなります。

問題のない会社はない。問題は決算にあるのです。問題と向かい合っていく経営者は力強いのです。問題点を抽出し、新たな改善策を考えていきます。「CとA」が「決算診断提案書」のことです。「決算診断提案書」は、全く新しく変わりました。5月から会員の皆様にリリースされます。

「自分の城は自分で守れ」といわれます。「会計事務所は自分で守れ」、当り前の事ですね。考えてみれば、この変化の時代は、「ネットとリアル」の融合です。決算診断こそ、経営者が会社を良くし、会計事務所を良くするのです。

好運を呼ぶ「鈍と根」

松下電器の創業者、松下幸之助氏は、23才の時に創業した。そして94才で没するまで、実に70年も長期間、「成長しつづけ、成功しつづけた偉大な人」でした。なぜ、どのようにして松下さんは、「かくも長い間、成功しつづけたのだろうか」、疑問が生まれてきます。数多くの語録集の中からわかります。

「私は失敗したことはありません。失敗したまま、やめてしまうから失敗で終わるのです。私は、失敗を反省し、工夫し、努力しつづけました。そのようにしたら全部成功しました。だから、私は失敗したことがないといっているのです。」これはすごいことばです。

まさに、「失敗を成功の一過程」としてとらえた。「失敗は肥料」だと考えた。だから失敗しても、ひるまなかったのです。語録の中で、松下幸之助氏は、「命をかけて」、「一生懸命」、「商売は真剣勝負である」と、いつも厳しいことばを言っていました。また、「反省、努力、工夫」ということばもよく使っています。

成功を支えたのは「強い心」であった。そしてその強い心は、たゆまず自分を励まし、「反省」するということによって、育てられたのでした。また、松下幸之助氏は「運が良かったから成功できた」と折にふれて語っていた。「努力が運を呼び込む」というイメージを持つようになり「努力運」ということばも使うようになったのです。

経営者は、正に厳しい時代です。経営者は今、生かされ経営をなされていることは「運」があればこそ、と思っているのです。「運」がなければ今、経営者になっていられない筈です。「運」といえば「運鈍根」です。

『「運は幸運で、鈍は愚直(努力)、根は根性」である。人生は七転び八起きである。運は「汐時」がある。失敗や挫折にくじけることもなく、ますますやる気を燃やして頑張っているうちに、運に巡りあうのだ。「第2の運」は「鈍(努力)・根」が運を呼び込むカギである』 私はこの「運鈍根」を座右の銘にしています。

自分の城は自分で守れ

「自分の城は自分で守れ」。トヨタ自動車の名番頭と言われた「石田退三氏」の「座右の銘」である。時あることに、時代や環境がどうしても、経営者は自らの知恵と才覚で、自分の会社を守らなければならないと語っています。石田退三氏はトヨタ自動車の3代目社長となり、1950年頃、倒産の危機にあった、トヨタ自動車を復活に導き、今日のトヨタ自動車の礎をつくった人物です。

3/22・23日の2夜連続5時間のTBSテレビでは「リーダーズ」。トヨタ自動車の創業者豊田喜一郎の「ものづくりの魂を貫き倒産の危機から、日本が世界に誇る自動車会社を創った男たちの涙と勇気と感動の物語」でした。多くの人たちはご覧になったと

思います。

トヨタ自動車は1950年、昭和25年には経営危機になり、労働争議が起こり、日本銀行の管理下に入った。豊田喜一郎は、失敗と挫折にくじけることなく頑張った。しかし、1952年3月、脳いっ血で57才の生涯を閉じた。好運に巡り合えることができなかったのです。

トヨタ自動車は、豊田喜一郎氏から石田退三氏に引き継がれ、「好運を呼ぶ、鈍と根」で、第2の運を、「鈍と根」が「運」を呼び込んできたのです。運についての第2の考え方は、むしろ「運がいい男」たちは、運は言うなれば「汐時」であって、失敗や挫折にくじけることなく、ますますヤル気を燃やしてがんばっているうちに、それにめぐりあうのだ。「鈍根が運を呼び込むカギ」だとこの人たちは信じている。人生は七転び八起きである。それが成功への道だと言いつづけた石田退三氏は、その良い例です。

石田退三氏は、人生に対する考え方として「七転八起」が根本にあると、言っているのです。「勝っても負けても苦労の連続だが、これに押しつぶされてはいかん。人生は『七転八起』で七たび転がされても、八たび起き上げればもともとである。途中でへたばりさえしなければ、だいじょうぶ、私はまず、この忍耐力と勇気が絶対必要であることを言いたい」。好運に乗じて、突き進むエネルギーもいるのだと言うのです

トヨタ自動車のドラマがあるのです。「仕事と人生」にはドラマがあります。浅沼経営センターにも、創業以来54年の歴史がある。皆様の会社にも創業以来の歴史があり、ドラマがあります。私たち一人ひとりがその人生の主人公です。それだけでなく、そのドラマの監督、脚本、主演、すべてを自分自身でこなすことができる。また、そのように自作自演で生きていくほかはないのが、私たちの人生というものです。

ですから何より大切なことは、自分の人生ドラマをどのようにプロデュースしていくか。一生をかけて、どのような脚本を描き、主人公である自分がそのドラマを演じて(生きて)いくかということです。

真剣さや熱意に欠けた、怠惰で弛緩した人生を過ごすほど、もったいないことはありません。人生というドラマを中身の濃い、充実したものにするためには、一日一日、一瞬一瞬を「ど」がつくほど真剣な態度で生きていくことが必要になってくるのです。

いつも燃えるような意欲や情熱をもって、その場そのとき、すべてのことに「ど真剣」に向かい合って生きていくこと。その積み重ねが私たち人間の価値となって、人生のドラマを、充実したものにするのです。

そのど真剣な熱意がなければ、いかに能力に恵まれ、正しい考え方をしようとも、人生を実り多きものにすることはできません。いくら優れた緻密な脚本をつくらうとも、その筋書きを現実のものとするためには「ど真剣」という熱が必要なのではないのでしょうか。